

嶺雲と現代

①

樋口一葉をいち早く評価した文芸評論家で、社会評論家としても活躍した田岡嶺雲(一八七〇～一九一二年)が今年、没後百年を迎えた。人種や性別のない社会を構想し、近代文明の拜金主義を批判した思想は今も色あせていない。

(岩岡千景)



⑤ 田岡嶺雲 1900年
④ 西田さんが高知県立文学館に寄贈し、「没後百年展」で展示されている嶺雲の自筆原稿



格闘した思想の跡

高知市中心部にある、高知県立文学館。田岡嶺雲の「没後百年展」を開催中の館内には、「国家主義と個人主義との衝突」と題され、一度書いた文を線を引き消したり、字句を入れて直したりした原

稿が展示されていた。「嶺雲の自筆原稿です。発禁処分を恐れて書き直した跡と思われる」と、学芸員の野々村昭美さんは説明する。「国家権力に対する個人の権利の非力さと、その弊害などを論じたものです」

高知出身の田岡嶺雲は早くから自由民権運動に目覚め、十一歳で政談演説会の弁士に。帝大文科大学(東大の前

身)を出て一八九五年に雑誌「青年文」を創刊。文芸評論家として泉鏡花や樋口一葉の才能を先駆けて評価。明治維新に続く藩閥・富閥打倒の政治改革も唱え、幸徳秋水とも親交があった。

高知浦安市在住の「著書の多くが政府から発売禁止の処分を受けて人びとが自由に読めず、文章も口語体でなく庶民になじみにくい漢文読み下し体だったから」と話す。嶺雲が書いた評論集は八冊のうち四冊が「安寧秩序ヲ妨害スルモノ」などとして発禁処分になった。当時としては急進的な言論だったためだ。一九〇五年刊行の「壺中観」では人種的、社会的、性的差別のない世界共同体を提唱。平和外交や女子解放の重要性なども唱えた。「書いたものが発禁処分になるのは、生きながら抹殺されるようなもの」と西田さんは話す。

学生時代に「嶺雲という底辺から見渡せば、近代の文学と社会全体が見えると思っただ」という西田さんは、六十年にわたって遺族や古書店、図書館などを訪ね、初版本や自筆原稿、写真などを収集。その思想を研究してきた。嶺雲全集も編み、全七巻のうち四巻を法政大学出版局から既に刊行。既刊に収録した初版

本や自筆原稿など約八十点を今春、高知県立文学館に寄贈した。「没後百年展」は来年三月末まで。寄贈された原稿のほか、莊子など中国の思想家や詩人を紹介した共著の叢書「支那文学大綱」や、監修や訳を手掛けた、日本で最初の中国古典の翻訳「和訳漢文叢書」などを展示している。

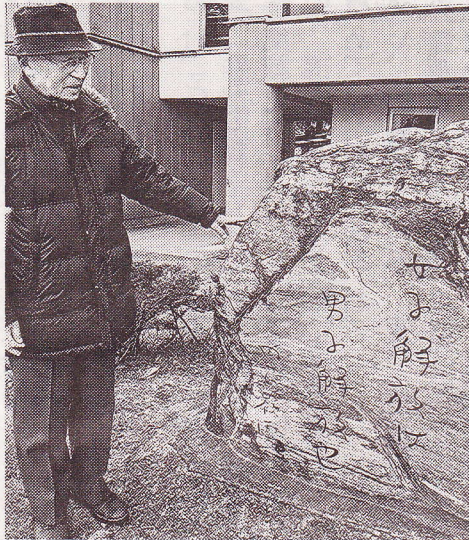
訂正

遺稿「国家主義と個人主義との衝突」は「刺客論」や「直訴論」と同様、発禁処分を恐れて、当時出版しようとしていた評論集(恐らく『うろこ雲』)への所収をあきらめたもので、ここでの加筆・訂正は「発禁処分を恐れて書き直した」のではなく、単行本所収のための単なる手入れ。

また、この論説は国家主義の弊害についても論じているが、結局は「社会問題」の真の解決は「国家主義」によっても、「個人主義」(今風にいえば、「新自由主義」)によっても不可能で、「社会主義」によるしかないこと結んだもの。なお「青年文」を創刊したのは当時『文庫』を出していた少年園で、彼はその主筆(今風にいえば、論説主幹)に迎えられたというのが正確。

文化

高知市内には「女子解放は男子解放也」と書かれた石碑がある。その前に立つ高橋正さん＝同市旭で



嶺雲と現代

①

明治時代の文壇や論壇で活躍した思想家、田岡嶺雲は、大正元(一九一〇)年に亡くなった。「嶺雲は当時、人気があつたんですよ」。高知市内で、高知ペンクラブ代表の高橋正さん(左)はそう言い、読売新聞が組んだ見聞き二ツ

西田勝さん



はあらずや、入神の筆にはあらずや」と絶賛。高橋さんは「嶺雲には、作家は都市の下層の民の悲惨な境涯を無限の同情をもって描き出せとの考えがあつた。一葉の作品はその持論に應えるものだったのだと思つ」と話す。

また、嶺雲を研究してきた文芸評論家の西田勝さん(左)は「嶺雲が近代文明の病根の一つと批判した拝金主義は、現代にも通じる」と話す。

岡山の新報「中国民報」の主筆を務めた嶺雲は、こんな評論を残した。「今日の如く

今に通じる

拝金主義批判と地球益重視

ないといふ風は、現代の一大病弊であると思ふ

また、日本で初めて女性だけの雑誌「青鞥」を創刊した平塚らいてうたち以前に、女子解放論を説いていた。自然において平等なはずの男女の関係が崩したのは夫婦という制度だと指摘。「女子解放は男子解放也」と女性の解放を求め、男女が対等・平等に協力し合う社会の必要を説いた。

西田さんは「真理を決定するものは理性にあらず、というショーペンハウアー哲学の影響を受けていた」と話し、こつ続けた。「直観を大切に、自分の目で見えないことを疑った。地球益が大事だとも考えていた。原発など現代のさまざまな問題も、嶺雲の思想に照らせば、解決のあり方が違ってくるだろう」

(岩岡千景)

金が総ての物の一番貴いもので、之を儲け、之を貯ふるが為には如何なる手段をも辞せ